

遙かな時の流れの中で

入 治 彦

奨励者紹介〔いり・はるひこ〕

日本キリスト教団京都教会牧師

京都刑務所教誨師

日本キリスト教団京都教区総会議長

主の言葉がわたしに臨んだ。
「わたしはあなたを母の胎内に造る前から
あなたを知っていた。
母の胎から生まれる前に
わたしはあなたを聖別し
諸国民の預言者として立てた。」
わたしは言った。
「ああ、わが主なる神よ
わたしは語る言葉を知りません。
わたしは若者にすぎませんから。」
しかし、主はわたしに言われた。
「若者にすぎないと言ってはならない。
わたしがあなたを、だれのところへ
遣わそうとも、行って
わたしが命じることをすべて語れ。
彼らを恐れるな。
わたしがあなたと共にいて
必ず救い出す」と主は言われた。

主は手を伸ばして、わたしの口に触れ
主はわたしに言われた。
「見よ、わたしはあなたの口に
わたしの言葉を授ける。
見よ、今日、あなたに
諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。
抜き、壊し、滅ぼし、破壊し
あるいは建て、植えるために。」

主の言葉がわたしに臨んだ。
「エレミヤよ、何が見えるか。」
わたしは答えた。
「アーモンド(シャークード)の枝が見えます。」
主はわたしに言われた。
「あなたの見るとおりだ。
わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと
見張っている(ショーケード)。」
主の言葉が再びわたしに臨んで言われた。
「何が見えるか。」
わたしは答えた。
「煮えたぎる鍋が見えます。
北からこちらへ傾いています。」

(エレミヤ書 1章4—13節)

UFOが旧約聖書に

私が小学校の5年生の頃、『少年マガジン』というマンガ雑誌を読んでいた時に、空飛ぶ円盤、未確認飛行物体UFOの特集記事が載っていたことがありました。そこには、旧約聖書のエレミヤ書の中にもUFOが出てきているというのです。「煮え立っている鍋を見ます。北からこちらに向かっていきます」ということが書かれている。この鍋とはUFOのことを示しているのだ、ということがまことしやかに書かれていました。もちろん、たわいもない話ですが、あの頃は何か興味をそそられた覚えがあります。でもそれが、エレミヤ書というものがあることを知った最初でした。

それから3年後、キリスト教主義の学校で使う中学生向けの聖書科の教科書を読んでおりましたら、ミケランジェロの描いたエレミヤの肖像が出ていまして、今でも印象に残っています。バチカン宮殿のシステリーナ礼拝堂の天井に描かれた壁画は、天地創造から始まって最後の審判まで391人の人物が描かれていると言われますが、その中の何人かがその教科書に載っていました。イザヤは、地上の出来事を鋭い目で見下ろす預言者として描かれていたのに対して、一方のエレミヤは、それとは対照的にかがみこみ、うつむき加減で手をあごに当てて、ロダンの「考える人」さながら、もの思いに沈んでいる図が紹介されていました。

預言者と言いますと、いつも確信に満ち、迷いもなく神から託された言葉を大胆に説き、世の不正を正していくといったイメージがありますが、エレミヤという預言者は、他の預言者と異なって、しばしば自分自身の職務のゆえに苦しみ悩み、その有名な告白に至っては、「主よ、あなたが私を惑わし私は惑わされて、あなたに捕らえられました。あなたの勝ちです。私は一日中笑い者にされ、人が皆私をあざけります」と言って、神に向かって「あなたが私をだました」とまで、訴えかけるような預言者でした。また「呪われよ、私の生まれた日は」といくじのないことも言っています。ある人はエレミヤの内向的な性格を評して、生まれ

ながらの心理学者だとさえ言っています。

エレミヤの時代

さて、先ほど読んでいただいたところに入る前に、エレミヤの預言活動の背景になっている時代について触れておきたいと思います。エレミヤが預言者として働いたのは、紀元前627年から紀元前587年までの40年間です。中東はこの頃、激動の時代でした。初めこの地方を支配していたのは、アッシリアでありましたが、後からバビロニアが台頭し、アッシリアを倒していきます。そのバビロニアを、今度はペルシャが占領していくといった時代でした。小魚を中ぐらいの魚が食べ、その魚を大魚が呑み込むと形容したらいいでしょうか。そんな大きなうねりの時代にイスラエルは北イスラエルと南ユダに分裂してしまいました。その後、北イスラエルはアッシリアによって滅亡。南ユダは、アッシリアの支配下におかれ、従属国として辛うじて、独立は維持されていました。南ユダの王ヒゼキヤは、多額の金銀をアッシリアに貢いで滅亡だけは免れたのです。ヒゼキヤの死後、王に即位したのは、マナセ。マナセもまたアッシリアの支配に従順に従うことによって王位を維持しようとした。その結果、そのツケも大きかったのです。というのも、エルサレム神殿にアッシリアの異教の礼拝様式を取り入れなければならなくなったからです。そして、この王の政策に異を唱える者は、迫害されていきました。正に、マナセによる暗黒の政治が続きました。一方、滅亡した北イスラエルの地方でも、異教の偶像崇拜と混合宗教になる危険性が増していきました。

やがて、ヨシヤが王として即位する頃になりますと、アッシリアの勢力も弱まり、宗教においてもアッシリアに遠慮する必要がなくなりました。この頃、実はエルサレムの神殿の修復中、神殿の壁の中から「新しい律法」ともいうべき出エジプト記の改訂版、今日の「申命記の母体」となるものが発見されたのです。それはイスラエル宗教の純粋性を保つものであって当時の王、ヨシヤ王はこれに基づいて偶像礼拝を禁止し、異教の多神教的なバアルやアシュタロテの偶像を撤去していきました。また、エルサレムだけを唯一の聖所とし、地方の聖所を廃止し、礼拝をここに集中いたしました。これが「ヨシヤ王の宗教改革」と呼ばれるものです。

エレミヤという人が預言者として立てられていったのは、このような時代でした。エレミヤも初めは、ヨシヤ王の宗教改革を評価し、「この契約の言葉に従わない者は、呪われる」とまで語っていました。しかし、ヨシヤ王が戦死しますと、せっかく国が改まったかに見えた改革が崩れてしまい、以前よりも状態が悪くなりました。エレミヤはこのような現実を見つめながら、外側からの力によってではなく、人間が本当に内側から作り変えられる「心の宗教改革」、新しい契約が結ばれる日がくる、と預言していたのです。

さて、エレミヤという預言者は、人々が「自分たちは、神に特別に選ばれた民だから、決して見捨てられることはない」とタカをくくって楽観している時には、神の意志として裁きと滅亡を語っていましたが、逆にエルサレムが陥落し、国が滅び、人々が捕虜としてバビロニアに強制連行されていった時には、絶望している人たちに向かって、希望の預言を語っていきました。けれども、神の言葉に立ち、冷静に政治、社会を見つめるがゆえに、時には徹底して滅びの預言を語ったこともありました。そのためにしばしば人々から、いや、友人や家族からも疎まれ、憎まれ、神と人との間の板挟みになって、苦しんだ人でもありました。彼はただ単に神の代理人として一方的に語ったのではなく、この混乱の中にある人々の重荷をも担いつつ、苦悩した人でもありました。預言者についていろいろな評価の仕方がありますが、アモスは正義と公平の

神を語り、ホセアは愛の神を語ったと言われます。イザヤは聖なる神を、それに対してエレミヤは民のために、痛み苦しむ神を宣べ伝えたと言われます。

召命

今日読んでいただいた1章は、エレミヤが預言者として立たされる召命の出来事が記されているところですが、エレミヤ書の序曲として、すでにその全体像のエッセンスともいべきイントロが聞こえてくるころであります。「主の言葉がわたしに臨んだ。／『わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。／母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し／諸国民の預言者として立てた』」。中東世界の覇権がこれからアッシリア帝国から新バビロニア帝国へと移る重大な転換期に、ある日突然、神は「エレミヤ、おまえを万国の預言者として立てる」というあまりに重い命令を発してこられたのです。何の前触れもなく、何の打診もなく。「おまえを万国の預言者として立てたいがどうだろう」ではなく、「おまえを預言者として立てた」という完了形の言葉をもって迫ってこられたではありませんか。

これに対するエレミヤの返答は、「ああ・・・」という深いため息でした。「ああ」とは、全く予期していなかった思いがけない不測の出来事に遭遇した時に出てくる言葉にほかなりません。自分の予定や計画やリズムが一瞬のうちに否定され、大きく変更を迫られる時、人は「ああ、なんてこった」と頭を抱え込むのです。事故を起こしてしまった時、大失敗をしてしまった時、「ああ!」と頭を抱え込みます。「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから」。めっそうもありません、とんでもない、と言って重すぎる要求命令を辞退しようとするのです。「青ニオですから」「語る言葉を知りませんから」と。まだまだ人間として人生の未熟者、未経験者、人に語れる自分の言葉をもっていないと。

けれども、これに対しても「青ニオといっちはならない」「わたしが命じることを語ればよいのだ」と神は説得されるのです。人間にとって慣れとか経験というものは大きな価値です。経験があればいろいろな場面にも余裕をもって対応ができますし、恐れや心配も少なくて済みます。しかし、エレミヤは自分の判断力で判断して無理だと、荷が重すぎると言っているのです。無責任に安請け合いして後でしまったと言うよりは誠実な対応でありましょう。そんなエレミヤに神は迫って「わたしがあなたといつも一緒にいるから大丈夫だ」とインマヌエルを語って、彼を励ますのです。それでも尻重く納得しないエレミヤに神は、自らの手を伸ばして、エレミヤの口に手を触れて、神の口としての役目を与え、共にいますことを保証するのです。そればかりではなく、神はエレミヤの目の前にアーモンドの木の枝と煮えたぎっている鍋といった二つの幻を見せて、エレミヤを説得しようとなさったではありませんか。

二つの幻

アーモンドの木とは、日本でいうところの梅のように春一番早くに白い花を咲かせて春の到来を告げるものです。それは年若くして預言者として引っ張り出されようとしているエレミヤにふさわしいものでした。早く目覚める木だからです。アーモンドの木とは、ヘブライ語でシャーケードと言いまして、見張るという意味のショーケードと語呂合わせにして、その国を見張る役を託そうとする幻だったのです。また、煮えたぎる鍋とは、それが北からこちらユダに侵入してくる国がある。それはバビロニアか、スクテアか定かではないけれども、北からの脅威を表していました。こうして、エレミヤが将来預言することになるであろう神の

言葉の種がまかれ、神共にいますことの保証、しるしを見せられたのであります。

こうして見てまいりますと、エレミヤの召命物語は、モーセの場合とよく似ています。モーセの場合は、神から召し出しを受けた時、「わたしは何者でしょう。わたしは口下手ですから」と言って、初めそれを辞退しました。それでも神は、モーセを捕らえて「わたしがいつも一緒にいるから大丈夫だ。口下手ならば、おまえの兄さんのアロンをつけてやる。彼は雄弁ではないか」と。あるいはまた、彼の杖を蛇に変えて、幻を、しるしを見せて、共にいますことを保証しました。これに反して、イザヤやエゼキエルという人たちは、最初からドカーンと神の幻を見せられ、圧倒され、結構早くから決断し、預言者の職務についています。イザヤなどは、「どうぞわたしをお遣わしてください」と、非常に積極的な潔いものでした。彼らは、志願型、ボランティア型と言われる人たちです。かたや、モーセやエレミヤは、スカウト型と言えるでしょう。このスカウト型の神の任命の受容の段階は、死や障がい、苦難の受容の仕方とよく似ています。不安、顕現、任命、躊躇・反論、取引、共在（共にいます）、反論、共にいます保証（しるし）、希望、派遣といったような形をとっています。

母の胎内に造る前から

さて、今日のところで着目したいのは、ここです。「ああ、わが主なる神よ／わたしは語る言葉を知りません。／わたしは若者にすぎませんから」と答えているエレミヤに対して、神がそれよりも先に、「わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。／母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し」ていたという言葉です。ふつう自分のことは自分が一番よく知っているはずですが、ですから、エレミヤはこの時、自らの年齢的な若さ、未熟さ、未経験、知識の不足、そういった実状から判断して、私はその役に不適格と断定的にもの言ったのですが、それに対して神は、私はあなたの生まれる前から、あなたのことはすでに知っていたと言われたのです。「母の胎内に造る前から」とは人の時の長さに対して、圧倒的に長い神の時が対立していることを表しています。年齢の若さに対して、無限の時の長さをもって、エレミヤ自身の判断力の備わる遥か彼方から計画されたことでもあったと知らされるのです。エレミヤの物心つく前から、ずっと前から、すべて神のご計画のうちにあったことを知らされるのであります。

『こどもさんびか』116番は、誕生日のお祝いをする時に歌われる賛美歌ですが、そこではこのように歌われています。「生まれる前から神さまに守られてきた友だちのたんじょう日です、おめでとう。生まれて今日までみんなから愛されてきた友だちのたんじょう日です、おめでとう」。私たちがここに存在するのも、私の能力、私の経験、私の判断力を超えて、神の守りと導き、また失って初めて分かるような人々の厚い愛に支えられて今日まである、ということです。誰も好き好んでその家に生まれたわけでもなく、自分の名前を付けたわけでもありません。私の名字は入と言います。時々、人（ひと）治彦様とハガキに書いてくる人もいます。この間は、入治彦様と書いてきた人もありました。ネットで調べましたら、日本に400人だけいることが分かりました。自分が選んだわけでもないのに、親を選べなかったのと同様に、このように名付けられてしまっていた現実があります。これはもう諦めて感謝して受け取るしかない代物です。

遙かな時の流れの中で

数年前、友人から『主旋律と装飾音』という本をもらいました。その本の最後にはこんなことが載ってい

ました。著者は、東京の霊南坂教会で牧師をしていた飯清先生です。同志社大学の神学部を卒業し、私のいる京都教会でも伝道師をしておられたことがありました。山口百恵と三浦友和、郷ひろみと二谷百合恵の結婚式の司式をしたことでも知られています。キリスト教音楽学校の校長もしていた先生でした。この飯先生は、ご自身が高齢となり、重い病気にかかっていると聞かされた頃ののことをこう記していました。音楽に詳しい方なので、「入院中も前夜式（通夜）の前奏曲のことを考え続けた。初めの方の讃美歌は昔からの愛唱だったが、式辞の後に『人よ、汝が罪の大いなるを嘆け』（『讃美歌第二編』九九）を選んでいった。（中略）この曲は装飾的な音符がたくさんあって、それを上手く奏こうとすると主旋律が曖昧になることが多かった。（中略）一九九一年の春、オルガン科の卒業演奏会で一人がこの曲を奏いた。私はその一音一音を味わいながら聴き、その後の挨拶でこう語った。『あの O Mensch……の曲はたしかに装飾音符をうまく奏こうとすると、どこが主旋律か解らなくなってしまいます。（中略）自分の生涯を顧みて、ひょっとすると私は装飾音符にばかり力を入れて、本来語るべき主題の旋律をどこかに忘れていたのではないだろうか」と反省しています……。』と書いておられました。

この先生は久しぶりに息子さんと会った時、車の中でその話をしたのだそうです。その時、息子さんは「なるほどね」とハンドルを握ったまうなずきただけだったそうですが、数カ月後、息子さんから手紙が届いたそうです。「夏のあの『人よ汝が罪の～』の話ですが、…たとえ装飾音符といえども、それも神様が与えてくださったものですから、1音も誤魔化さず最後まで弾き切ってください」という手紙をもらったそうです。この先生は息子さんの一言によって、深い慰めをもらったのではないのでしょうか。私たち一人ひとりの人生もまた、自らの小さな時を超えて、装飾音符も含めて、そんな神の与えてくださった大きなうねりの時間の中にあるのではないのでしょうか。私の時に対して、神の時はあまりに長いのですから、自らの短い時から神の長い時に、遙かな時の中に身をゆだねていきたいものです。

2018年4月18日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録